

5/17
II-202

幼児期の遊び活動の検討

— 労働との関連において —

箱沢女子短期大学 土方 弘子

はじめに

子どもの教育にかかわっての遊びの意義づけはすでに多くの指摘が行われているが、実践の場面では遊びの指導が保育活動のすべてであるような遊びの能動的な傾向が強みられる。

発達における遊びの正しい意義づけや、適切な指導方法の確立のためには、さまざまな追求が必要であろう。ここでは、遊びと労働との関連を考察することによって遊びの役割や指導の原則を明らかにしていきたい。

そのためには、まず人間の活動形態についてふれなければならない。従来、人間の活動には次の四つがあげられている。基本的生活、遊び、学習および労働である。栄養摂取、集団生活も前提とする人間の食事、排泄、睡眠のあり方を習慣として定着させることも内容とする基本的生活、活動それ自体のために行われる活動としての遊び、自らの力を蓄えつくりかえることが目的である学習、生活向上に役立てることも目的として外界に働きかける労働である。年令が低いほどこれらの諸活動は未分化であるが、幼児期に至ればかなり明確にとらえることができるし、分化させること自体保育の課題の一つでもある。この考察において遊び、労働という場合、以上の観点に立脚したものである。

遊びと労働の同質性

人間は労働を通して人間を作ってきたという命題は、人類の系統発生をたぐれば必然的に導き出される。動物と区別される直立歩行と道具の使用に始まる人類の歴史の中で、人間は労働することによって自然に対する認識や技術性を獲得し、言語を生みだし、意識も成長させた。そしてまた群的存在から社会的集団的存在に転じさせ、目的意識性と導き人間を含む自然を自己の生存に役立つよ

うかえてきた。

また、この人間の進化の過程と社会発展は、遊びについても大きな示唆を与えてくれる。すなわち、遊びが人間にとって初等的なものでなく、労働が遊びに先行し、遊びは社会発展過程における社会的必要性（後継者養成）に対処して発生してきたという指摘がある。アレントは「遊びは、労働の子どもである」とことも強調している。

また、民俗学の諸成果は遊びが大人の労働の模倣であり、遊びに欠くことのできない「オモチャ」の語源が「モチャリビ」「モチャリビ」に求められることを明らかにしている。

このように子どもの遊びは、人間の基本的な活動としての労働にその根源をもっている。したがってまた、遊びは労働と同じ諸側面をもった活動であることが導きだせる。これらの点を明瞭に指摘してマカレンコは次のように述べている。「あそびは子どもの生活に重要な意義をもっており、おとなの活動、仕事、職場と同様の意義をもっている。子どもがどんなふうに遊ぶか、その子が大きくなってからどんなふうに働くかを多くの点で示している。」「あそびと仕事との間には、多くのものが考えているほど大きな差異はない」と。

すなわち、子どもは遊びの中で周囲を認識し、知識・技術を学び、感覚運動機能を発達させ、社会的集団的行動様式と思考力を形成していく。こうした遊びの教育的意義は、労働の教育的意義と基本的な差異を判別することはできない。

小学校段階ではあるが、労働教育をすすめている岐阜県のK小学校のレポートには、労働教育に必要なこととして、①ものを作ることを通して目的を自覚し、計画を立て、段取りを定めるという労働のプロセスを組織していく、②もの、素材の法則を知って、それに対して手足を動かし感覚を働かせ、技能・技術を発達させる、③実践を通して自然の法則を認識していく、④お互いの意志の伝達、協力が不可欠となる、⑤喜び、苦しみ、悲しみなど人間的に重要な感情を体験を通してつかみとる、の五項目をあげている。発達段階を十分考

慮しなければならぬことはいくつまでもないが、それを超えてなおかつ、労働教育の意義も納得させるものがある。この労働教育の意義に遊びの教育的意義を対比して見れば、同じ結論に達することは明白である。

遊びと労働の異質性

遊びと労働には本質的な差がないといっても、それらをいずれかに解消することはできない。マカレンコが読んで指摘しているのは、次々である。「あそびと仕事のちがひ、それはたゞ次々といふことにある。仕事は社会的生産に物質的、および文化的の価値物、い、かえれば、社会的価値物の生産に人間が参加することである。あそびはそういう目的を追求するものでなく、社会的目的には直接関係をもっていない」。

労働の成果として、現実的な使用価値がつくりだされ、生活も豊かにしていくこと、そして社会的な有用性、い、かえれば他人のために自己の力を役立てるといった部分も含めて労働の独自の役割が指摘できるのである。現実価値を生みだすことが明確な対象、社会的有用性が確認しやすい対象への働きかけが、幼児期の労働として位置づけられる。動植物の飼育栽培、最近各地で試みられている料理づくり（やさいも、サラダ、おだんご等）など、労働の教育として有効な活動となっている。

ソビエトの就学前教育要綱においては、労働が独立してとりあげられている生後6年目（5才）を見ると、労働の内容は、①日直の仕事、②自然界における労働（動物の飼育、野菜の収穫等）、③手の労働が掲げられている。幼児における労働の教育の視点を実践に入れることによって、さらに内容の系統化を指向する必要がある。

労働の特性に対して、遊びの他の活動と区別する基準は、遊びのもっている虚構性にあるといえる。ワロンは「あそびの中には虚構（フィクション）が入りこんでいる」とのべているが、虚構性もたんに一要素、一部分として位置づけるのではなく、遊びの基本的な特性と捉えているのはグライズキーである。子どもは「うそ、この世界」で遊ぶ

といわれるが、それは現実から隔離したものではなく、まさに現実生活の反映と捉えねばならない。その場合、単純な反映ではない。グライズキーが指摘するように、「子どもの遊びは体験したことや単なる追憶ではなく、体験した印象の創造的な改作であり、またそれらを複合させ、その中から新しい現実をつくりあげ、子ども自身の要求と興味に合わせたもの」なのである。いわば、創造につながる想像の世界をつくりだすのである。

遊びの土台には現実の生活がある。しかも、現実認識が深く豊かであり、たしかであればある程、虚構の世界を豊かにくりひろげることが可能になるのである。

保育における遊びと労働

(1)遊びと労働はその本質において対立するものではないし、相互に大きなへだたをもつものでもないという関係から、遊びを労働に、労働を遊びに転化発展させるものがあるという結論が導き出せる。実践はそれを証明している。勿論、遊びが遊びとして終ることも、労働が労働として完結することもあることはいくつまでもない。

(2)遊びと労働は同質の要素をもつと同時に、また独自性をもっている。前者が虚構性にもとづかずけられた活動であるのに対し、後者は現実的な使用価値を生みだすための目的意識的活動である。とすると、保育においてはまずわづかに目的意識性を育てるために、ことに労働が明確な位置づけを与えられねばならない。簡単なものからいくつもの順序だった活動の体系へと見直しを拡大し、持続させる指導が考えられねばならない。

(3)遊びを支える虚構性は、生活における現実認識の反映であり、同時にあそびが虚構性を通じて現実認識を育てる。一方労働は現実的効用を生みだすために、虚構性を排除する必要とその過程に内在している。その点で労働は子どもに虚構と現実を分化させる役割をもち、現実を労働の目的に照らしあわせて認識させる。

(4)現実認識の深まりが虚構性を一層豊かにさせ、虚構性が労働の目的設定の要因であるように保育にとって最も重要な両者の関連をみることが出来る。

(以上)